



ラッティ (NIPPO) が魅せた異次元の独走。
RATTI (NIPPO)

ラッティが魅せた
異次元の独走。

Summary



新人 盛 一大 (愛三) スプリント力を発揮しプロローグを制する。
MORI (AISAN)

代わって昨年は日大チームで参戦、今年から愛三工業の一員として頭角を現してきた盛一大が、初のマラカイトジャージに袖を通し、今後の成長を期待させた。

期待と言えはもうひとり、第3ステージでは学生チームから新星が誕生した。集団スプリントとなったフィニッシュで、シュラー (ドイツ)、山本雅道 (シマノ) に続きゴールを駆け抜けたのが、法政大学の島田真琴。学生が表彰台に上がったのは、第1回目の北海道大学の松井久以来、国際大会になってからは、初の快挙となった。また今年は、鹿屋体育大学の三浦光誠や中島康晴、日本大学の太庭伸也などが、展開の中で先頭集団を積極的に引くシーンもあり、学生の健闘が光った。

一方、好調なチームの波に乗り総合時間2位をキープした岡崎和也 (NIPPO)、清水都貴や鈴木真理といったブリヂストン・アンカー勢、愛三工業の新保光起、別府匠と狩野智也 (シマノ) をはじめ、常連となっている日本人選手たちも、コンスタントに力を発揮した。しかし個人総合時間順位は、第1ステージから上位の変動がなくフィニッシュを迎え、個人ポイントおよび山岳賞も、上位陣はほとんどメンバーが変わらない展開で、どの選手もこころという決め手に欠けていた感もあった。プロローグで盛一大が袖を通して以降、マラカイトジャージを着た日本人選手の姿を一度も目にする事ができなかったのも残念なことである。元気のいい学生が育っていることもあり、ベテラン、中堅、若手ともに、日本人選手の来年の巻き返しを期待したい。

常にきっちりとチームを作ってくるNIPPOだけに、来年もまた優位は動かないだろう。しかも5連覇の偉業もかかっている。しっかりとした目標のあるチームは強いというのは定説だ。今後、NIPPOの天下は続くのか、他のチームが意地を見せるのか。北の大地を風をきって駆け抜けるツール・ド・北海道のドラマは、まだこれからも続く。



2日目、今度はウィズィアック (NIPPO) が独走でゴール。
WIESIAK (NIPPO) at finish area.



トップ集団で健闘する三浦 (鹿屋大)
MITAKI (NIFS in Kanoya) in the leading group.

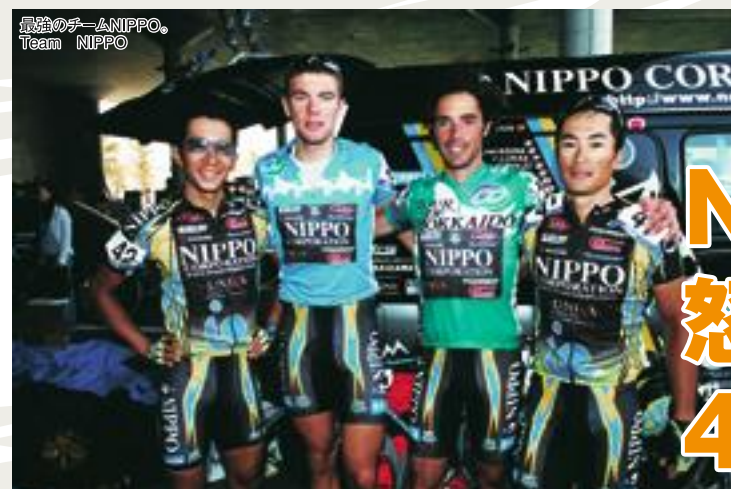


メイン集団の中で積極的に走る島田 (法政大)
SHIMADA (Hosei Univ.) attacks in the main bunch.

帯広市をスタートし、阿寒町、弟子屈町、池田町と道東を巡り静内町、門別町と太平洋沿いの日高路を西へ向かい、札幌でフィニッシュという全790kmの道のりで、NIPPOがその強さを思う存分に発揮し他を圧倒した。中でも第1ステージから際だった活躍を見せ、追従を許さないリードを保ちながら、最後までリーダージャージを守りきったラッティの飛び抜けた実力が光った。結局、ラッティは、個人総合時間、個人総合山岳賞の2冠で圧勝。個人総合ポイント賞こそチームメイトのウィズィアックに譲ったものの着実に2位をキープした。昨年の大会で旋風を起こしたワン・カンボ (スミタ・ラバネロPi) を思い出された。そして何よりも、NIPPOは大会4連覇を達成。安定した強さに拍車がかかってきた。

このように今大会は、ラッティを筆頭とするNIPPOの強さばかりが目についたが、各ステージを振り返ると、見応えのあるレースは随所にあった。まずプロローグでは、3連覇がかかっていた屈指のスプリンター西谷泰治 (愛三工業) は、あと一步のタイムが伸びず3位と願いは叶わず。

総括 2005



最強のチームNIPPO。
Team NIPPO



ベテランに頼りつつ躍進する中島 (鹿屋大)、太庭 (日本大)
(L to R) NAKAJIMA (NIFS in Kanoya) and OBA (Nihon Univ.)

NIPPO
怒濤の完全勝利で
4連覇を達成!